

# 富山県美術館



環水公園から全景を望む

## review

### 選評

旧富山県立近代美術館を今回の敷地に移転新築する際に、二十一世紀の視点での新しい展示を念頭に名称から「近代」を外すことからはじまり、展示の内容はもとより県民の参加型の催しに対応可能なアトリエや県民が主体的に利用できるギャラリーに注力し、レストラン、カフェに加え、屋上に遊具と芝生広場を設けて県民の憩いの場として公開するなど、「アート」と「デザイン」の双方を対象にした開かれた美術館として企画され、これに呼応して建築が計画され、かつ施設運営されている。

前面に富岩運河環水公園、背後を神通川に挟まれた不整形な敷地に、放物線の平面形状をとった建物を、前面の環水公園の諸施設と軸性

を持たせ、立山連峰に平行な線でファサード面をカットするなど巧みに配置している。メインファサードは立山連峰に正対し美術館メインロビーの吹き抜けの大ガラススクリーンより立山の雄大なパノラマを遠望することができる。展示室や収蔵庫、機械室は水害リスクから二階以上に配置している。二階の四つの展示室は中央廊下を挟み房のようにレイアウトされ、この中央廊下に仕込まれた建具の開閉により企画に応じた順路の組み換えが出来るように工夫されている。展示室の大空間を二階に持ち上げるために、展示室全体を巨大な箱状の構造体と捉え、上下階にわたり架け渡された大規模な鉄骨メガトラス構造としている。放物線の平面形状の中にこのメガトラス構造体が配されるため、施工では建方の手順と納まり確認、架橋精度確保のため BIM や三次元測量システムを活用している。現地審査当日はこの中央廊下の突き当りの扉が閉じられ、建物の背後にある神通川への内部空間の抜けが感じられなかったのが残念だった。展示室階の中央廊下建具と壁面の面材は氷見市の里山杉材を棒状にしたものを格子に組んだもので、共通の形状テーマを感じさせるアルミ鋳物の階段手摺とともに質感が高い。この施工では、木格子の赤白の色違いを選別し、工場ユニット組立をして色合い確認をしている。床のタモ材も現場



南西側の外観



BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計、施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。この賞は、1960年にはじまり2019年で60回を数えました。

《2019年 第60回 BCS賞受賞作品》愛知県立愛知総合工科高等学校／赤坂インターシティAIR (赤坂一丁目地区第一種市街地再開発事業)／OIST 沖縄科学技術大学院大学 フェイズ1／太田市民会館／オーディオテクニカ本社／GINZA SIX／新発田市新庁舎／新山口市駅前広場「0番線」・南北自由通路／東京ガーデンテラス紀尾井町／東京ミッドタウン日比谷／富山県美術館／ナセBA (市立米沢図書館・よねざわ市民ギャラリー)／HIRAKATA T-SITE／フェスティバルシティ (中之島フェスティバルタワー (東地区)、中之島フェスティバルタワー・ウエスト (西地区))／立命館大学大塚いばらきキャンパス



建築主より

Message from Client

富山県美術館  
館長

雪山行二 Koji Yukiwaka

### 新しい美術館像を求めて

「場のちから」を最大限に引き出すこと、これが建築設計における内藤廣さんの基本姿勢だと思います。移転・新築によって誕生したこの新美術館では、立山連峰の雄大なパノラマを満喫できるよう、また、木と緑に恵まれた周囲の公園と一体化した運営ができるように設計されています。居心地の良さも、内藤さんの建築の際立った特徴といえるでしょう。杉やアルミなどの県産材を多用したゆとりのある空間構成は、来館者にくつろぎを与えます。当館は、その前身である富山県立近代美術館(1981年開館)の活動の成果を踏まえつつ、美術愛好家のための美術館から、アートの体験に基づく、世代を超えた幅広い人びとの憩いの場、交流の場へと、その役割を大きく広げました。当館は美術館の新しい生き方を示すひとつのモデルになったかと思います。



設計者より

Message from Architect

株式会社内藤廣建築設計事務所  
代表取締役

内藤廣 Hiroshi Naito

### この地の景観と地域の素材を生かし、新しい文化拠点と視点場を創出する。

栄えある賞をいただきありがとうございます。この建物は、展示室などの大きな部屋を積み上げねばならないので、空間を自由につくれる鉄骨造としました。1階がエントランスホールと駐車場、2階が人の心の内面に向き合う「20世紀美術」、3階が他者とのコミュニケーションを求める「デザイン」、屋上が未来へと向かう子供のための「公園」、という新しい試みの美術館です。われわれの仕事は、この革新的なプログラムを、この地の素材を駆使して、この場所固有の景観と結び合わせることでした。まず、遙かに見える立山連峰の絶景、広がる市街地や手前にある環水公園の眺望を取り込もうとしました。公園の基点に向かう軸線を中心軸とした大きな放物線を描き、立山に向かう意志を表現するようにそれをガラスファサードで切断し、この場所の景観的な特性を設計に取り入れようとしてきました。主要産業であるアルミを駆使し、氷見産のスギ材を通路などに多用しました。この美術館は富山に新しい価値と視点場をつくったと思います。



施工者より

Message from Builder

清水建設株式会社  
北陸支店 工事長(当時 作業所長)

亀井優 Masaru Kamei

### みんなに愛され続ける美術館

天気の良い日に、屋上庭園から眼下の環水公園と正面に広がる雄大な立山連峰を見ると、いつも「素晴らしい」と思わず声が出ます。工事に当たっては、建築主、設計の内藤先生、他関係者の皆様のこの美術館への想いを十分に理解した上で、施工に携わる全員が「子供たちに誇れる美術館を造ろう」の合言葉と共に、各自が持てる技術を十二分に発揮し、妥協を許さずに品質を造り込んできた結果が、このBCS賞受賞につながったと思います。また、多くの地元産材料の納まりに細かな配慮がされた見せ方・生かし方も素晴らしく、展示品と同じレベルで楽しめる建物の出来栄となっております。開館以来、予想以上の来館者が訪れていることを聞くにつけ、あらためてこのプロジェクトに関わることが出来たことに喜びと誇りを感じると共に、これからもみんなに愛され続ける美術館であることを願っています。



1. メインエントランスの木張りの軒天 2. 立山連峰の雄大なパノラマが遠望できるガラス張りのホワイエ  
3. 屋上庭園「オノマトペの屋上」 4. 2階展示室の入口

富山県美術館 計画概要	
●建築主	富山県
●設計者	(株)内藤廣建築設計事務所
●施工者	清水建設(株) 三由建設(株) 前田建設(株)
●所在地	富山県富山市木場町3-20
●竣工日	2017年8月7日
●敷地面積	12,548㎡
●建築面積	6,634㎡
●延床面積	14,990㎡
●階数	地上4階、塔屋1階
●構造	鉄骨造、 一部鉄骨鉄筋コンクリート造

搬入後、色合いを確認して各展示室に合った配置を行うなど、きめ細かい施工配慮を行っていることも建築の質感に大きく貢献していると思われる。中央廊下の内装にはじまり木材や左官、錆鉄板、アルミ板を使い分け、組み合わせた内装はどの立ち位置から見ても美しい。

環水公園と一体化した施設計画を行い、屋上を公園化し一般開放している。建物外周の屋外階段と内部動線の双方でアプローチできる。オノマトペの屋上と呼ばれる屋上広場にはオリジナル遊具を配した子ども遊び場を設置している。もともとの敷地は小高い丘で、子どもたちに人気のあった遊び場を屋上に再現したということである。地元産業のアルミの型材や鋳物、錆鉄板、県産材の杉、富山の豊富な地下水の省エネ利用、立山連峰の眺望活用など、地域の資源と強く結び付き、地域に開くスタンスを強く持った美術館となっている。

〔選考委員〕北川原温・山本茂義・菅順二